

三遠南信自動車道 飯喬道路関連遺跡発掘調査完了記念展示会

掘るしん in いいだ

掘るしん

Uncover Shinshu in Iida



2016年11月8日(火)～11月27日(日)
会場 飯田市美術博物館

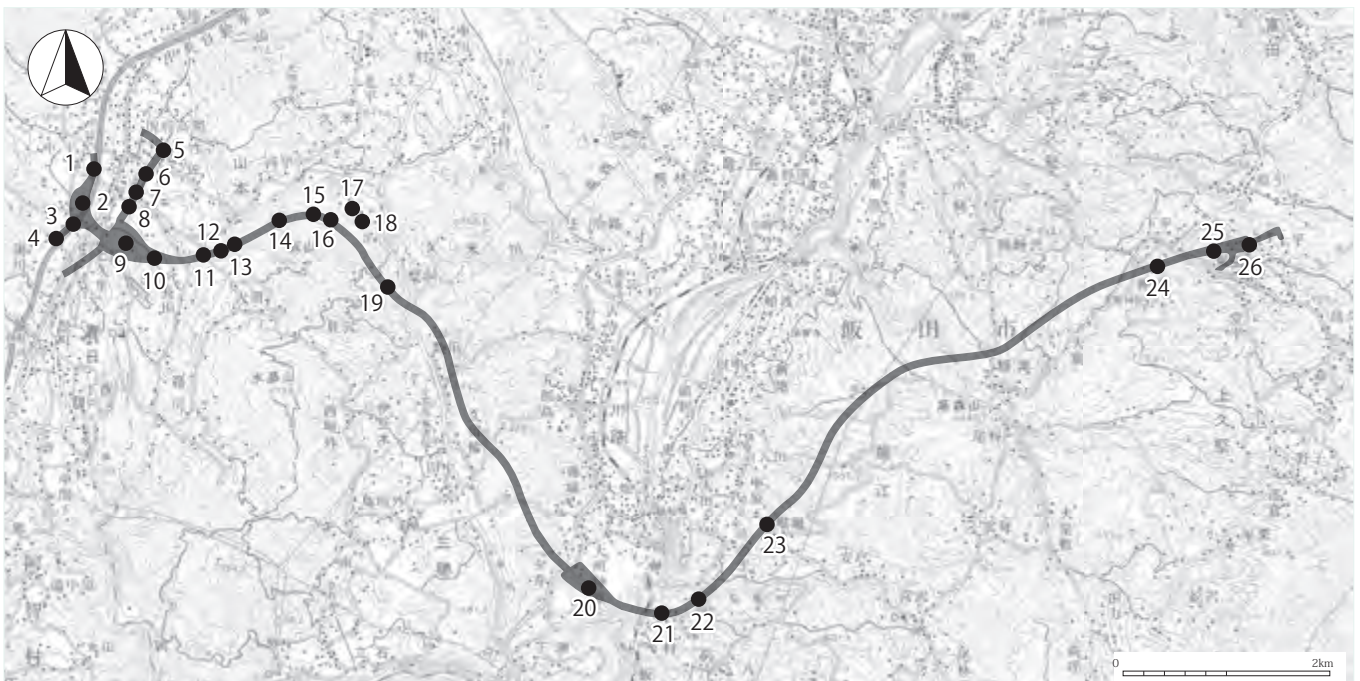
主催 長野県埋蔵文化財センター
共催 飯田市教育委員会

ごあいさつ

長野県埋蔵文化財センターでは、平成 11 年 4 月から平成 28 年 3 月まで 17 年間の長きにわたり、飯田市山本地区から上久堅地区まで、全長 14.6km の三遠南信自動車道飯喬道路建設用地内に分布する遺跡を対象に発掘調査を行ってきました。その結果、列島最古級の石器が発見された竹佐中原遺跡をはじめ、縄文時代の拠点集落と目される川路大明神原遺跡、戦国時代の国人領主 知久氏の本城である神之峯城跡など、旧石器時代から江戸時代にいたる 26 か所の遺跡の様子を明らかにすることができました。

このため、発掘調査に当たり御支援、御協力いただいた飯田地域の皆様に、調査成果の一端を御披露することを目的として、三遠南信自動車道飯喬道路関連遺跡発掘調査完了記念展示会「掘るしん in いいだ」を開催することといたしました。展示会や会期中の講演会、シンポジウムを通じて、未来へ続く高速道路の下に私たちの祖先が残した貴重な文化遺産が埋もれていたことを、末永く記憶に留めていただければ幸いです。

開催に当たり、御協力いただいた飯田市美術館、飯田市上郷考古博物館はじめ共催・後援団体各位に対して、厚く感謝申し上げます。



1 山本西平遺跡	2 石子原遺跡	3 辻原遺跡	4 赤羽原遺跡	5 白山遺跡	6 山本大塚遺跡	7 寺沢遺跡
8 並松遺跡	9 竹佐中原遺跡	10 森林遺跡	11 下り松遺跡	12 太鼓洞遺跡	13 横山遺跡	14 久米ヶ城跡
15 久米大畑遺跡	16 久米上田遺跡	17 久米上の平遺跡	18 久米上の平南遺跡	19 本洞遺跡	20 川路大明神原遺跡	21 井戸端遺跡
22 下村遺跡・鶯ヶ城跡	23 芦ノ口遺跡	24 神之峯遺跡	25 風張遺跡	26 鬼釜遺跡・鬼釜古墳		

三遠南信自動車道飯喬道路関連遺跡発掘調査完了記念展示会「掘るしん in いいだ」 目次

神之峯城跡と鶯ヶ城跡	長野県埋蔵文化財センター	河西克造	1
戦国時代の飯田を掘る	飯田市教育委員会	羽生俊郎	3
三遠南信の戦国時代一下伊那を中心として一	長野県立歴史館	館長 笹本正治	4
飯喬道路関連遺跡寸描			6
竹佐中原遺跡の調査	長野県埋蔵文化財センター	鶴田典昭	9
竹佐中原遺跡調査の意義	奈良文化財研究所	国武貞克	11
日本における旧石器時代研究の現状・近年 10 数年の動向	東京都立大学名誉教授	小野昭	12

神之峯城跡と鶯ヶ城跡

長野県埋蔵文化財センター 河西克造

戦国時代、武田氏の侵攻前の下伊那（特に飯田盆地）は、天竜川右岸（以下、竜西）を信濃守護総領家の分流である小笠原氏が、天竜川左岸（以下、竜東）を国人領主知久氏（知久領）が支配した。飯橋道路建設に伴う発掘では、主に天竜川を臨む段丘（飯田市千代地区）と知久氏の本拠（飯田市上久堅地区）に分布する遺跡から室町・戦国時代の遺構・遺物が発見された。



知久氏領地遠景 天龍峡から南アルプスを望む

知久氏本城（神之峯城跡）での発掘成果

神之峯城跡は、権現山・二本松山付近を水源とし、天竜川に流入する玉川左岸の独立丘陵に立地する。独立丘陵の頂き（以下、山頂部）には、曲輪（主郭、二郭など）と堀切などの城郭施設が明瞭に残っている。今回は北西側中腹部分 29,243㎡を発掘した。

調査区の地形は、山頂部から麓にのびる複数の尾根と谷が複雑に入り組む。室町・戦国時代の遺構は、谷を繰り返して埋め立てて平場を形成し、そこに構築している。特筆される遺構として、調査区の西



神之峯城跡 主郭と調査地



神之峯城跡礎石建物跡



神之峯城跡 出土遺物

側で発見された寺院（堂宇）の可能性が高い総柱の礎石建物跡がある。礎石建物跡は東西3間、南北2間で、建物跡は南側調査区外にのびているため全容は不明である。この建物跡は、出土した古瀬戸製品と瀬戸美濃大窯製品の年代から、15世紀中頃に構築され16世紀後半に廃絶したものと推測される。礎石の検出面から炭化材が出土したことと、被熱した遺物が出土したことから建物は焼失した可能性が高い。

今回の発掘成果として、以下の2点がある。

第1は、独立丘陵の中腹にある複数の谷が15世紀中頃に埋め立てられ、平場を形成したのちに遺構が構築されたことと、16世紀後半以降に調査区の中央にある尾根上に断面V字形の堀切が掘削されていることである。15世紀中頃～16世紀後半以降には、独立丘陵の中腹で大規模な土木工事が行われていたことが明らかとなった。

第2は、独立丘陵の土地利用である。神之峯城跡の城郭施設は山頂部に限られており、地表面観察によって、15世紀段階に存在したことが推測できる。一方、発掘調査では、曲輪が確認されない中腹から15世紀中頃に構築された寺院を発見した。神之峯の独立丘陵には、15世紀代すでに山頂の「城郭」と中腹の「寺院」の2つが存在していたことになる。

知久氏の神之峯城入城時期は、それを示す文献史料がないため明らかでないが、市村咸人らによると、16世紀初頭頃と推定されてきた。

文献史料では、上久堅地区に知久氏以前に入封した国人領主は確認されていない。今回の発掘で明らかとなった土木工事は、国人領主レベル以上でなければ成し遂げることができないと考えられるため、15世紀代に知久氏が神之峯城に入城したことを示唆している。



神之峯城跡 堀切の断面

知久領の縁辺部での発掘成果

眼下に流れる天竜川とその対岸の小笠原領を臨む尾根に立地する鶯ヶ城跡では、城郭のほぼ全域を発掘した。発掘の結果、尾根上には堀切を画して主郭と二郭の2つがあったことが推測され、斜面では平場や城内道、尾根先端では堀切が発見された。また、出土した古瀬戸製品と瀬戸美濃大窯製品の年代からすると、15世紀後半～16世紀中頃に築城されたものと判断できる。さらに、城郭に先行する中世の墓坑群が発見され、墓地を壊して築城したことが明らかになった。

調査成果として、神之峯城跡とほぼ同時期の小規模城郭の構造が明らかとなり、知久氏本城とは異なる階層が築城したと推定された。また、知久領の縁辺部には「村の城」と想起される城郭があることが判明し、知久領の城郭体制を考えるうえで重要な資料となった。



鶯ヶ城跡全景



鶯ヶ城跡 堀内のつづて



斜面に築かれた平場

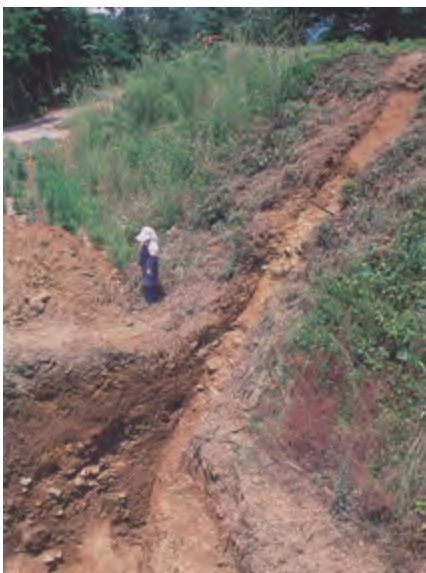
戦国時代の飯田を掘る

飯田市教育委員会 羽生俊郎

飯田市内には、鈴岡城跡、松尾城跡、南本城城跡、飯田城跡など、長野県を代表する戦国時代の城郭がある。近年の発掘調査によって新たな知見とともに、新たな謎が浮かび上がってきている。鈴岡城跡は、信濃守護を務めた小笠原氏の分流鈴岡小笠原家の居城で、二郭を取り囲む大規模な横堀が特徴的である。平成19年、公園整備に先立ちトレンチ調査を実施した。その結果、二郭を取り囲む横堀が、薬研堀であること、その法面の傾斜角は70度に達することが確認された。また、堀底には、堀と並行・直交する土塁状の高まりが確認されており、障子あるいは土橋か橋脚台の可能性が考えられている。

二郭内では切土と盛土による造成が確認されている。切土は本郭側で確認されており、本郭の優位性を保つための造成と考えられる。一方、盛土は南西側で確認され、緩やかな斜面を平にするためと考えられる。また、多数の柱穴が確認されたが、具体的に建物構造や配置を確認できなかった。ただし、二郭の土塁の下から柱穴が確認されたことにより、二郭が今よりも広い時期があり、後に土塁が設けられたことが判明した。

遺物は、青磁の碗・瀬戸美濃系の天目茶碗や茶壺・播鉢・土鍋等が出土している。青磁や茶器などの権威財と、土鍋など生活用品が混在している。



鈴岡城跡の横堀断面

南本城城跡は伊那谷でも大規模で複雑な縄張りの山城である。城主来歴については不明だが、戦国末期の元亀・天正年間の戦国大名間の抗争に関わったと考えられており、隣接する北本城城跡と一体の城として捉



北本城城跡の堀

えられることも多い。北本城城跡は昭和56年に小学校建設、平成15年に保育園建設に先立ち発掘調査を実施した。その結果、埋もれていた堀や多数の柱穴が確認されたほか、陶磁器類や銅製の湯道が出土しており、私銭を铸造していたことが注目される。発掘による成果ではないが、北本城城跡の横堀には堀内に障子がある。鈴岡城跡とは異なる形状であるが、市内の城では、堀内に凹凸を設けることが、特別な事例ではなくなった。

鈴岡城跡と北本城城跡から出土した陶磁器は、14世紀後半のものもあるが、15世紀後半から16世紀前半に製造されたものが中心である。小笠原氏や座光寺氏の活動が確認できる時期である一方、同じく彼らが活躍した16世紀後半の遺物は出土していない。出土遺物の製造年代から城の年代を推し量るには、慎重に検討する必要がある。このような出土遺物と城が存続したであろう年代とに開きがあることは全国的に知られている。一方、市内でも竜東の神之峯城跡では、15世紀後半から築城が確認されている。この差異が、城の立地や天竜川の東西の違いなのか、調査手法等によるものか、今後の課題である。

飯田城は下伊那唯一の近世城郭である。今年の2月に本丸跡を発掘し、御用水の跡と、建物規模は不明ながら御用水を遡る時代の大きな掘方の掘立柱建物跡が見つかった。江戸時代に整備された御用水に先行する掘立柱建物であることから、武田氏あるいはその後の徳川氏の時代の主殿や門などの可能性がある。近世以前の飯田城については不明な点が多く、貴重な知見といえる。

三遠南信の戦国時代—下伊那を中心として—

長野県立歴史館 館長 笹本正治 ささもとしょうじ

戦国時代における三遠南信の結びつきを象徴的に示すのは、下伊那を甲斐の戦国大名である武田氏が、たびたび遠江・三河、さらには美濃への進軍ルートとして使った事実であろう。

武田信玄は元亀3年(1572)9月26日に越前大野城(福井県大野市)主の杉浦玄任等へ、遠江出陣の備えについて連絡し、9月27日に遠江・三河に向けて兵を動かした。信玄本人も10月3日に甲府(山梨県甲府市)を発ち、10月10日に遠江に乱入した。飯田市と浜松市天竜区との境に当たる兵越峠の名前は、武田信玄がこの時に通ったからだとの伝承があるが、武田軍は下伊那から南下して遠江・三河に攻め込んだのである。

信玄は11月19日、越前の朝倉義景へ二俣城(浜松市)を囲み、別働隊が美濃岩村城(岐阜県恵那市)を攻略したことを伝えた。そして、12月22日に信濃・甲斐の兵を率いて三方ヶ原(浜松市北区)で徳川家康軍を破ったのである。

年が明けた元亀4年(天正元年、1573)1月に信玄は三河に侵攻し、2月10日に野田城(愛知県新城市)を落とし、3月6日に秋山信友へ東美濃の防衛を命じた。この間に信玄は病状が悪化したので、長篠城(新城市)で療養したが帰国を決め4月12日に甲斐に戻る途中で病没した。一般に没した場所は下伊那郡阿智村駒場とされる。

信玄の跡を嗣いだ勝頼は7月晦日に三河の国衆である奥平定勝・奥平定能に書状を出し、家康の攻撃から長篠城を守るため人数を23日から送っ

ていることを伝え、25日には山県昌景に長篠城攻めについて指示した。しかし、9月8日に長篠城は家康の攻撃により陥落した。9月21日に勝頼の兵は、家康と通じた三河作手城(新城市)主奥平定能・信昌父子を滝山で攻撃して敗れた。

勝頼は天正2年(1574)正月27日に美濃の岩村を攻撃し、6月5日には遠州高天神城(静岡県掛川市)を攻撃した。真田信綱が勝頼に三河長篠への援兵を求めてきたので、勝頼は9月8日に遠江在陣の兵を長篠へ出勢したことを報じた。

天正3年(1575)4月、勝頼は大軍を率いて三河に侵攻し、5月に長篠城を攻めた。5月13日、家康と同盟関係にある織田信長父子が後詰めとして出陣した。その結果、21日に長篠合戦が行われ、武田軍は大敗した。

武田勝頼は天正4年(1576)かと思われる8月10日遠江出陣にあたり「覚」とする27条からなる条々を保科正俊にあてた(年次比定には諸説あり)。そこに示されている内容は、下伊那を中心とした三遠南信のつながりをよく示している。

第1条では、武田軍が遠江に出馬しようと計画していることを告げる。そうなれば家康は信長に救援を依頼するだろうから、木曾義昌は伊那へ後詰めとして兵を出すようにしなければならない。伊那郡のすべての人がその覚悟をして、大きなことも小さなことも武田信豊の命令や日向宗栄、保科正俊・正直の意見を守って、忠節を果たすように申しつけるようにと命じている。

つまり、伊那郡(南信)は甲斐から三河を根拠とした徳川家康の領する遠江に攻め込むための通路であった。もし遠江に進軍すれば、尾張や美濃などを領する織田信長の攻撃を受け、伊那郡はその最前線になるかもしれない。伊那郡は三河・遠江と信濃、さらには甲斐との接点なので、勝頼は注意を払わねばならないのである。

第7条では、小笠原信嶺は在所人数をことごとく連れて、清内路(阿智村)口を警護し、自身は山本(飯田市)に材陣するようにと命じている。

第8条では、下条信氏は波合(阿智村)口・新野(下伊那郡阿南町)口以下へすべての人数を



長篠合戦古戦場跡に復元された馬防柵



阿南町を流れる天竜川

召し連れて警固し、自身は山本に在陣するようにさせた。

第16条では、^{しもいな}下伊奈衆は大島城（下伊那郡松川町）に、^{もみ}上伊奈衆は高遠（伊那市高遠町）へ、^{もち}糲子を入れて置くように申し付けることとある。

第17条では、万が一諸口を敵に破られたならば、^{はるちか}小笠原信嶺と下条信氏は大島城に、^{はるちか}春近衆は高遠城に移るようにすること。

第23条では、^{やまがさんぼうしゆう}山家三方衆（奥三河の作手の奥平氏、長篠の菅沼氏、田峰の菅沼氏）は、下条氏を加えて働くように。

第27条では、大島城・高遠城で物不足の時には注進してくるよう。そうすれば必要物資を送るといふ。

このような内容からだけでも、伊那谷南部と遠江・三河とがいかに密接につながっていたか伝わってくる。武田家は攻めていくときにも、常に攻め込まれることをも考えねばならなかったのである。

天正9年（1581）3月22日、勝頼の属城である高天神城は家康に攻められて、信濃出身の栗田鶴寿等が戦死した。勝頼は館を新府に移し、12月26日に新館へ移るに際して^{もりふ}守符・^{たまえ}玉会等を贈ってくれた諏訪社上社の^{ごんのほうり}権祝に礼状を出した。しかし、木曾義昌が信長に通じたため、天正10年2月2日、勝頼は義昌を撃とうとして諏訪郡^{うえはら}上原に陣を置いた。

2月6日、織田信忠の先鋒として^{かわじりひでたか}河尻秀隆等が、木曾と美濃岩村の両口より武田領国に攻め込んできた。そして、2月14日に信長の将^{だんかけはる}団景春・^{もりながよし}森長可等が木曾峠を越えて伊那郡に入り、飯田城の^{ばんざいおりべ}坂西織部・保科正直は敗走した。2月16日には木曾義昌が伊那谷を北進する織田信忠の兵に呼

応して木曾谷を鳥居峠に進み、^{いまふくまさかず}今福昌和を破った。伊那では翌17日に大島城が落城した。21日に^{たきがわかずます}信長は滝川一益・河尻秀隆等に高遠城攻略のため、その道筋に^{つけしろ}付城を築かせた。

勝頼は28日に^{あなやまのぶただ}穴山信君が家康に降り、織田信長に服属したことを聞き、兵を信濃より甲斐に還し、新府城（山梨県韮崎市）を焼き、逃亡した。3月2日に高遠城が落城し、勝頼も3月11日に織田信忠の軍に敗れ、甲斐田野（山梨県甲州市）で戦死した。ここにもいかに下伊那が信濃や甲斐への入口として重要であったかが示されている。

以上は戦国時代の三遠南信地域のつながりの一端を示したに過ぎない。この地域はフォッサマグナが走りこれによって形成された谷が、また天竜川が、地域の文化と物資を結びつけてきた。信濃には他地域から谷を沿って設けられた道や川、そして峠を越えて、様々な文化が流入してきたが、その最も代表的な入口が下伊那だといえよう。

塩尻市大門^{しほみや}から発掘された柴宮銅鐸は、東海地方に特有な三遠式と呼ばれる形式である。また、松本市にある弘法山古墳は、古墳時代の初期に築造された前方後方墳である。この古墳は東海地方西部の濃尾平野から強い影響を受けていると考えられている。とすると、これらの文化は下伊那経由で来た可能性が高い。

諏訪大社では葛井池（上社諏訪社葛井神社の神池、茅野市）に、上社で1年使用された道具や供物を大晦日の夜に沈めると、元旦に遠州の佐奈岐池（場所不明）に浮かんでくるとの伝承がある。このことも信濃と遠江の深い結びつきを示す。

この地域の文化的な一体感をよく示すものに芸能がある。遠山の霜月祭、新野の雪祭り、坂部の冬祭、三河の花祭り、水窪西浦の田楽など、それぞれの芸能には強い共通性が見られる。



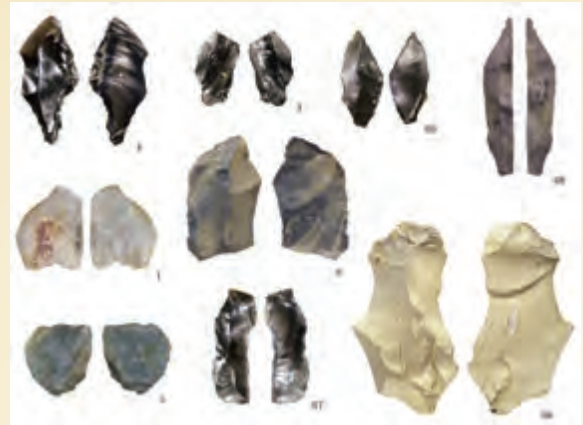
遠山の霜月まつり

飯喬道路関連遺跡寸描

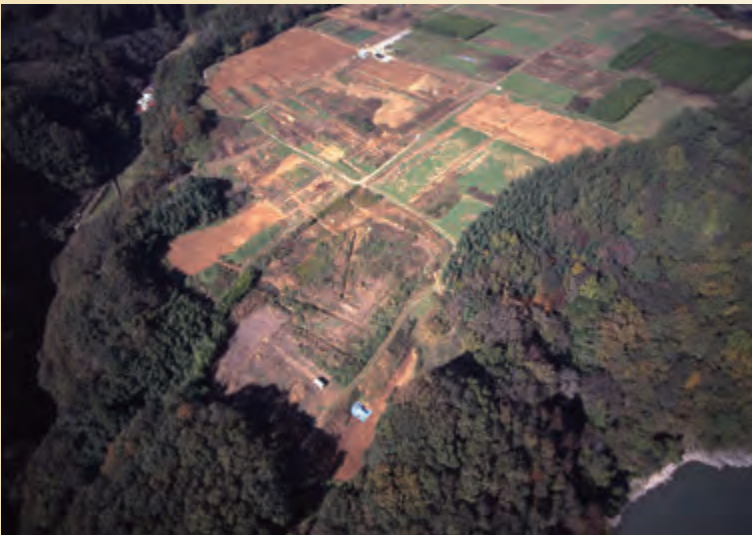
旧石器時代

竹佐中原遺跡 A・C 地点で見つかった国内最古級の石器群はホルンフェルスを主体とし、片麻岩や石英岩など9種類の石材で構成されていた。それらは、ほとんどが竹佐中原遺跡から5km圏内で採集できるものであった。

一方、竹佐中原遺跡 D 地点や石子原遺跡、川路大明神原遺跡などでは、産出地まで100kmを超える黒曜石でつくられたナイフ形石器など、後期旧石器時代の石器が出土した。



後期旧石器時代の石器たち



縄文時代早期は狩猟域、中期は集落利用された大明神原の台地

縄文時代

飯喬道路にかかる遺跡は、遺物の散布地も含めると縄文時代に属するものが圧倒的に多い。

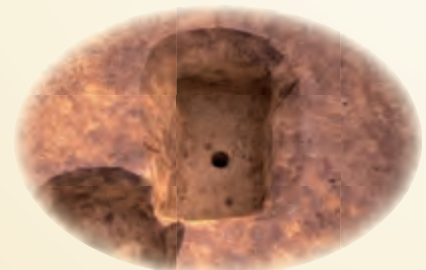
石子原遺跡では、早期の土器が、^{たてあな}竪穴建物跡や集石炉などから見つかっている。

川路大明神原遺跡では落とし穴が広範囲に分布し、早期末葉～前期初頭にかけて、一帯が広大な狩猟場所であったことを物語っている。続く中期は、46軒の竪穴建物や多数の食糧貯蔵穴をもつ集落跡が見つかり、大明神原の台地上にはおよそ1,000年を通じてほぼ継続的に営まれたムラがあったことがわかる。

そのほか竹佐中原遺跡、^{もりぼやし}森林遺跡、^{さが}下り松遺跡、^{おにがま}鬼釜遺跡でも、竪穴建物数軒程度の小規模な集落跡が見つかっている。



川路大明神原遺跡の竪穴建物（縄文中期）



落とし穴（縄文早期～前期）



紀元前 11000		紀元前 500		300
旧石器時代	縄文時代		弥生時代	古墳時代
石子原遺跡 竹佐中原遺跡 森林遺跡	石子原遺跡 鬼釜遺跡 川路大明神原遺跡 下り松遺跡	竹佐中原遺跡 森林遺跡	鬼釜遺跡 川路大明神原遺跡 竹佐中原遺跡 森林遺跡	石子原遺跡 鬼釜古墳 下村遺跡

弥生～古墳時代

弥生時代は竹佐中原、森林、川路大明神原、鬼釜の各遺跡で、いずれも後期に属すると考えられる数軒の竪穴建物跡を発見した。

石子原遺跡では昭和47年の発掘調査で確認されている方形周溝墓^{ほうけいしゆうこうぼ}3基に加え、新たに3基が見つかった。墓跡に伴う遺物はないが、いずれも古墳前期と推定している。また、5世紀末から6世紀初頭の円墳周溝も検出した。(昭和47年調査範囲の西側)

一方、鬼釜遺跡では6世紀前半代の円墳周溝を調査した。周溝からは竜東地区で初めて馬墓も見つかった。



鬼釜古墳の周溝(上)と出土遺物

奈良～室町時代

古代の遺跡は少ない。鬼釜遺跡で平安後期と想定できる竪穴建物跡や掘立柱建物跡^{ほったてぼしら}を複数発見し、集落を構成していることがわかったが、それ以外は竹佐中原遺跡で竪穴建物跡を1軒調査したのみである。

中世に入ると、神之峯城跡^{かんのみね}から谷一つ隔てた風張遺跡^{かざはり}や鶯ヶ城跡^{うぐいすがじょう}に近接する井戸端遺跡^{いどばた}で、掘立柱建物を主体とする集落跡を確認した。また、鶯ヶ城跡では築城以前の墓地が見つかった。



鶯ヶ城跡の墓地(左)と風張遺跡の掘立柱建物跡(上)

710	794	1185		1603		1868	1989
奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代	明治	大正 昭和 平成
	鬼釜遺跡 竹佐中原遺跡		井戸端遺跡 鶯ヶ城跡 鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡 下村遺跡		石子原遺跡 山本大塚遺跡		

江戸時代

集落跡は発見できなかったが、石子原遺跡や山本大塚遺跡では墓地が見つかった。石子原遺跡の墓地からは人骨を伴う墓が24基あったため、12体の人骨についてミトコンドリアDNA鑑定を試みたところ、同じ母系に連なる血縁関係をもつ3組の墓を同定することができ、この墓地が特定の家族のものである可能性が示された。



石子原遺跡の墓と(左)17号墓の手鏡と毛抜き、一分金(上)



◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 三遠南信自動車道関連遺跡調査のあゆみ ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

1990年(平成2年11月)	三遠南信自動車道飯橋道路 基本計画決定
1994年(平成6年11月)	県教委 飯橋道路建設予定地内埋蔵文化財詳細分布調査(以降6か所試掘調査)
1999年(平成11年4月)	川路大明神原遺跡発掘開始 縄文時代の落し穴126基や中期の集落跡(竪穴建物跡46軒)発見
2000年(平成12年5月)	石子原遺跡発掘開始 縄文早期前葉の竪穴建物跡6軒を調査
(平成12年6月)	石子原遺跡 古墳前期の方形周溝墓3基や後期の円墳周溝を調査
2001年(平成13年7月)	竹佐中原遺跡 27日にA地点で国内最古級の石器出土
(平成13年9月)	竹佐中原遺跡 第1回調査指導委員会開催(以降10回開催)
2002年(平成14年9月)	森林遺跡発掘開始 弥生後期の竪穴建物跡2軒を調査
2003年(平成15年4月)	下り松遺跡発掘開始 縄文中期後半の集落跡(竪穴建物跡5軒)発見
(平成15年8月)	山本大塚遺跡 キセルや火打金、火打石など豊富な副葬品を伴う近世土坑墓を調査
2004年(平成16年7月)	石子原遺跡 埋葬人骨を伴う近世土坑墓26基を調査
(平成16年10月)	竹佐中原遺跡 C地点でホルンフェルスを主体とする石器出土
2005年(平成17年3月)	長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅰを刊行
(平成17年5月)	竹佐中原遺跡 D地点で黒曜石製石器や斧形石器などが出土
2006年(平成18年2月)	竹佐中原遺跡 飯田創造館で調査報告会・シンポジウムを開催
2007年(平成19年3月)	石子原遺跡 山本西原遺跡 辻原遺跡 赤羽原遺跡 報告書刊行
(平成19年10月)	井戸端遺跡 中世のコ字状溝跡等に区画された平坦部の遺構群を調査
2008年(平成20年7月)	鶯ヶ城跡発掘開始
2009年(平成21年3月)	森林遺跡 下り松遺跡ほか13遺跡 報告書刊行
(平成21年6月)	鶯ヶ城跡 主郭と二郭を分ける堀跡から飛礫が集中して出土
2010年(平成22年3月)	長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱおよび川路大明神原遺跡報告書刊行
2011年(平成23年8月)	鬼釜遺跡 縄文中期後半から中世の集落跡(竪穴建物跡13軒)発見
(平成23年11月)	鬼釜古墳 周溝内で馬の埋葬土坑を検出 鉄製の馬具3点出土
2012年(平成24年3月)	井戸端遺跡 下村遺跡(鶯ヶ城跡) 芦ノ口遺跡 報告書刊行
(平成24年4月)	風張遺跡 中世の集落跡(掘立柱建物跡15棟)を調査
(平成24年9月)	神之峯城跡 法心院と目される礎石建物跡を調査
2013年(平成25年8月)	神之峯城跡 中腹の堀切や掘立柱建物跡を調査
2016年(平成28年3月)	鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡報告書刊行

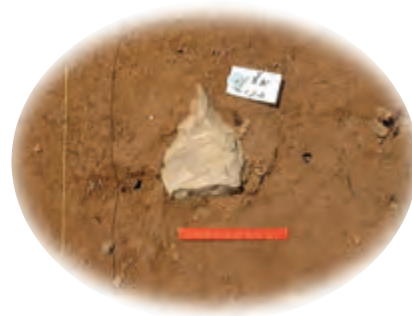
竹佐中原遺跡の調査

長野県埋蔵文化財センター つるたのりあき 鶴田典昭

2000年、前・中期旧石器遺跡のねつ造が発覚し、その後の検証調査で70万年前とされていた日本列島の人類史の始まりは、史実でないことが判明した。4万年前を確実に遡る遺跡は今のところ日本列島では見つかっていない。

2001年に竹佐中原遺跡で4万年前より古い可能性がある石器が出土した。人類学の学説では、4万年前頃に新人（現生人類）が日本列島に渡来し、列島の人類の歴史が始まったとされる。4万年前以前の遺跡が見つければ、旧人や原人が日本列島にいたことになる。

長野県埋蔵文化財センターは、事態の重要性を鑑み、竹佐中原遺跡等調査指導委員会を設置し、発掘調査を実施した。遺跡ねつ造事件をふまえ、積極的な情報公開、後の検証が可能な調査と記録を心がけた。石器1点毎の出土状況の写真記録、遺物が出土した土層の動植物による擾乱状況の記録、遺物集中地点の土壌水洗など、これまでにな



石器の出土状況



出土石器のインプリント記録

い精緻な調査となった。7か年の発掘の結果、A～Dの遺物集中地点を確認した。2005年にA・B地点にかかわる報告書を刊行し、2010年にはC・D地点の調査成果と、A・B地点の新知見を加えた調査報告書を刊行し、発掘調査は終了した。

竹佐中原遺跡の石器群

調査報告書の結論は、以下のとおりである。

- ① 4か所の遺物集中地点は竹佐中原Ⅰ石器文化（A～C地点）と、竹佐中原Ⅱ石器文化（D地点）とに区分される。
- ② 竹佐中原Ⅱ石器文化は後期旧石器時代最古段階のものである。
- ③ 竹佐中原遺跡Ⅰ石器文化は、竹佐中原Ⅱ石器文化に先行し、3.5万～5万年前のものと同定される。

A～C地点は、石器群の特徴とその年代から、新人が残した石器であるのか、旧人が残した石器なのかが問題となる。



調整加工がない大型剥片



発掘作業風景



台石・石英岩の出土状況

A～D地点の石器群の概要は次のとおりである。

A地点：剥片石器はホルンフェルスのみを用い、調整加工がない大型剥片が石器の主体である。敲打痕がある台石がある。56点出土。

B地点：剥片石器は珪質凝灰岩が多く、調整加工がない小型剥片が石器の主体である。12点出土。

C地点：剥片石器はホルンフェルスを主体とし、石英岩、珪質凝灰岩、緑色凝灰岩、凝灰岩、細粒砂岩、片麻岩など多彩な石材を用いる。調整加工がない大型・中型・小型剥片石器と敲石、台石、礫群がある。769点出土。

D地点：黒曜石製の調整加工がない小型剥片石器、局部磨製の斧形石器、砥石など8点出土。

斧形石器は日本列島の後期旧石器時代の初期に出現する石器であることから、D地点は約3.5万年前のものであることが推定できる。A～C地点の石器群は、打ち欠いた石片（剥片）をそのまま道具とするものである。微細剥離などの使用痕跡が認められる明らかな石器もあるが、石器の多くは風化が著しく、使用痕跡が観察できないため、道具か否かの判別が難しい。調査報告書では、剥片の剥離工程と出土状況の分析から、道具として使われた剥片を抽出し、提示した。



竹佐中原遺跡全景

新たな視点と残された課題

調査報告書では、剥片石器に焦点を当てた石器群の評価を行った。A地点、C地点では台石が出土した。後期旧石器時代を遡る可能性が指摘される静岡県ヌタブラ遺跡、広島県下本谷遺跡でも台石が出土している。旧石器時代の台石が出土する遺跡は少ない。台石の存在から竹佐中原I石器文化をどのように評価できるのか、今後の課題としておきたい。

次に、C地点の石英岩製石器の評価である。中国や朝鮮半島の前期旧石器時代にみられる多面体石器との関連が指摘されていた石器である。調査指導委員であった佐川正敏氏の最近の見解では、中国などの前期旧石器時代にみられるピックと呼ばれる石器の加工を意図している可能性があるとしてされている。



現地説明会

竹佐中原遺跡の石器群については、縄文時代の石器が含まれているとの論考も示されている。また、遺物集中地点以外の石器については、論考することなく報告書が刊行された。上記の課題とともに今後検討していかなければならない。

竹佐中原遺跡調査の意義

奈良文化財研究所 くにたけさだかつ 国武貞克

竹佐中原遺跡でA地点の石器が発掘されて15年が経ちました。私はこの遺跡の発見を新聞報道で初めて接しましたが、前年発覚のねつ造事件の混乱が残るなかでの大きな報道に、期待とともに不安も感じました。しかし刊行された2冊の報告書を熟読するとその不安はまったくの杞憂であったことを知るとともに、この遺跡の調査研究はそのような時代背景のなか、世間の期待と不安の強いプレッシャーをものともせず、むしろそれを全面的に受け止めて堂々と進められてきたことを知り、感銘を覚えました。調査に携わられた長野県埋蔵文化財センターの皆様のご苦労がしのべれます。

今回、私にはこの遺跡の発掘調査の意義についてコメントを求められました。外部の者の目に、この遺跡の発掘調査がどのように映っているのかを、ちょっとお聞きになってみたいとのお趣旨かと思われま。そこで2005年と2010年に刊行された報告書をもとにして、当時の印象も交えつつ、そのご関心にこたえてみたいと思います。

この遺跡の発掘調査の意義は主に5点にまとめられると思います。

1点目は、発掘調査の基本をこれでもかと徹底された点です。事実を明確に記録して後の検証に耐えられる情報を残すことは、厳しく追及されねばなりません。しかしこれほどまでに徹底された例は珍しく思います。出土石器のインプリントの提示などは、併行していたねつ造遺跡の検証を意識されたのでしょうか。慎重で周到な発掘手法は当時からずいぶん話題となりました。遺物の完全な回収を目指して、4haもの面的な発掘調査が敢行され、余すことなく石器分布が解明されたことは大きな成果に繋がりました。また、未知の石器群に対して調査時に可能な限りの自然科学的手法を駆使して年代を追い求めたことは、結果に関わらず高く評価されるべきです。

2点目は、調査と研究の全過程を明示されたことです。発掘調査現場がいち早く公開されました。ねつ造事件の教訓以上に、遺跡の重要性への差し迫った認識がそうさせたものと推察します。成果

を固める過程を市民の皆様に発表会などで随時公開されました。最終報告書では、自然科学分析結果の解釈、遺物認定、石器器種、石器文化の単位認定の過程を徹底的に明示されています。

3点目は、それらを踏まえた成果への責任を、全面的に負っておられる点です。可能な限りの知見と分析に基づき、不足を認識されつつ、石器群の解釈に仮説を提示されました。得られた成果に対して妥当性を強く主張できる部分とそうではない部分を、責任をもって明示しておられます。中期か後期か移行期かという時代帰属に結論を直結させず、成果から分かることを語り尽くすことが次に繋がるという着実なスタンスも特筆されます。

4点目は、その過程で重要な課題を明示された点です。A・B・C地点からなる竹佐中原Ⅰ石器文化は、D地点からなる同Ⅱ石器文化に先行するという仮説は、考古学的な分析による解釈に基づきます。この解釈の妥当性は、全国の他の類似遺跡でも共通して課題となることを明示したうえで、時期的な前後関係とする仮説が採用されているわけです。この課題の明示は、この遺跡の調査成果に普遍的な意味を与えています。

5点目は、この遺跡の調査成果を将来に伝えることに強い責任をもっておられる点です。敢えて困難な現実を乗り越え現地保存区を設定されました。将来の年代測定技術の発展をも視野に入れ、後世に検証機会を残すという学問的な強い責任を感じます。更新世から変わらぬ山並みに囲まれた大きな景観のなかに、貴重な石器包含層が残されたことは、列島最初期の人類の足跡を、肌で感じさせることが出来るかけがえのない地域の宝物です。

後期を遡る旧石器研究は、層位、遺物認定、石器解釈、年代決定など不十分な条件から逃れられません。竹佐中原遺跡では、ねつ造発覚直後という厳しい環境においてこそ稀にみる周到にして十分な発掘調査と成果公表がなされました。それゆえに未知の石器群の探索はかくあるべしというスタンダードを堂々と示しているように思われます。



調査報告会・シンポジウム



日本における旧石器時代研究の現状・近年 10 数年の動向

東京都立大学名誉教授 小野 昭 おの あきら

目的

2000 年 11 月に暴露された旧石器捏造事件^{ねつぞう}によって、日本における旧石器時代研究は汚辱のドブに叩き込まれた。結果に責任を負う筆者の世代が、そこからどのように這い上がろうとしたか、その軌跡が研究動向に確実に反映されている。われわれは評論家ではなく研究者であるので成功もあれば失敗にもさらされる。本講演は、あくまでも筆者の経験を通して、主に学協会などの制度面における具体的な事例をとおして研究動向の特徴を探ることを目的とする。事件発覚当時、信頼の回復には 30 年くらいかかるだろうと筆者は発言したことがあるが、失笑を買った。しかし回復如何は外部評価であるので、自己評価してはならないという点からすると時間がかかると踏んだ筆者の判断は正鵠を射ているはずである。

対象

研究上の批判の脆弱さ、資料公開の不充分、国際的研究交流の薄弱、旧石器研究の日本全国的なネットワークの欠落、国際的な研究交流の不在など、なんでもかんでもゴミ箱のような言われようであったが、当たっている問題もいくつかあった。

旧石器研究の全国組織結成の必要が議論され、われわれは 2003 年 12 月に「日本旧石器学会」を設立した。また多くの困難を克服して日本・韓国・中国・ロシアの各国旧石器時代研究組織を繋いで組織加盟方式の国際組織「アジア旧石器協会」Asian Palaeolithic Association (APA) を 2008 年に立ち上げた。小なりと言えども国際組織設立に関与したことは戦後日本考古学では最初の事例であり、特に組織面の構成に関し日本旧石器学会は大きな役割を果たした。

日本旧石器学会は 2016 年までに 14 回の大会が行われ、2011、2016 の両年は APA 日本大会と重なり事務総会のみであったため、今までに計 12 回の大会シンポジウムで旧石器時代研究の具体的なテーマで議論が行われた。

個々の研究者の問題関心は多様であるので日本旧石器学会の大会シンポジウムのテーマにすべて包摂されるものではない。しかし十数年の組織体としての問題意識はそこに明瞭な軌跡を描いている。後期旧石器時代の始まり、石刃技法と石材環境、環状集落の機能、狩猟と生活、分布・年代・環境、データベース『日本列島の旧石器時代遺跡』

の到達点、広域編年対比、石材の獲得・消費と遺跡群形成、更新世末環境変動と人類活動、などがそれである。

アジア旧石器協会は各国の研究組織の体系、学問研究の伝統の違いなど、想定を超える違いがあり、当初は問題意識の背景を理解することも容易でない面があったが、2016 年で第 8 回を迎え、現在は互いに違いを認めあえるところまで到達したと言えよう。問題



第 4 回アジア旧石器協会 2011 年大会（上野・国立科学博物館講堂）

関心の相互浸透も確実に認められる。

こうした中で、われわれはこの十数年間に意識的に、大学院生、若手研究者に旧石器関係系の国際会議への参加を促し、励まし、叱咤激励してきた。口頭、ポスターの発表、成果を論文化し、様々な国際誌に投稿するよう相当のエネルギーを投入してきた。これは当然ながら捏造事件時の批判にこたえる対応であった。いまだアンケートなどで統計は取っていないが、少なくともこの間に国際誌への旧石器時代関係の論文掲載は筆者らの世代を含め推定200本以上は実現したであろう。学会発表は当然もっと多いはずである。大学院生や若手が日本だけでなく世界の研究動向を踏まえて日本で仕事をし、日本の研究事例を世界に発信することの重要性を訴えて実践してきた。

その結果 APA、SAA (アメリカ考古学会)、UISPP (国際先史学原史学会議)、INQUA (国際第四紀学連合) 等の学会や関連雑誌、British Archaeological Reports (BAR) International Series, Quaternary International (INQUA 機関誌)、ERAUL (ベルギー・リエージュ大学)、AEAE (ロシア・ノボシビルスク)、CRP (テキサス A&M 大学)、Archeometriai Műhely (ハンガリー)、Vertebrate Paleobiology and Paleoanthropology Series (Springer)、Geoarchaeology 等他多数の雑誌に日本の旧石器研究の成果を反映させてきた。

問題関心

日本における旧石器時代研究のこの10数年全体を鳥瞰してわかる最大の特徴は、新人 Homo sapiens の世界各地への拡散という世界各地で取り組まれている世界的な問題関心とリンクして問題を立てる意識の成立であろう。年代論、後期(上部)旧石器時代の始まりの問題、黒曜石など新たな資源開発の開始、日本列島独特の石器組成の成立、編年広域対比の問題など、この課題に触発されて取り組まれた。また、この課題への詳細編年の問題も国際的に取り組まれ、旧人/新人交代期に焦点を当てた酸素同位体ステージ OIS3 (海洋酸素同位体ステージ MIS3) の細分と気候変化を世界各地で検討する課題は日本で本格的に検討されだした。



日本旧石器学会シンポジウム予稿集 12 冊 (2003 - 2015)

筆者の経験に強く引き付けて言えば、「東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学」の委員会を、筆者が代表となって考古学(出穂雅実・小田静夫・加藤博文・工藤雄一郎・佐藤宏之・島田和高・諏訪間 順・堤 隆・比田井民子・山岡拓也)、人類学(海部陽介)、気候変動(公文富士夫)、火山灰編年学(鈴木毅彦)、地形学(久保純子)、花粉学(叶内敦子)、哺乳類化石(高橋啓一)の17名の提案で日本第四紀学会内に特別委員会を設置して2007年から2010年まで5年間取り組み合計28の研究報告を行った。捏造事件後、考古学的な時期区分の枠組みの名称が立場の違いから対話の遮断につながることを避けるため、敢えて「酸素同位体ステージの考古学」という代替概念にもならない用語を代理指標(proxy)として使い実践的に議論を深めた。

深められるべき点

研究者が自らの問題意識にもとづいて忠実かつ自由に個別の論点を展開する。これは研究の基本であるが10年くらいを経て全体の軌跡を見ると時代の特徴が刻印されたベクトルを読み取ることができる。しかしそれだけでは抜けるものがある。具体的には2つある。第1は比較の方法論の開拓、第2は環境と人類の関係の内実の具体的探査である。旧石器時代研究に限定されない問題でもあるが、取り組まれるべきまさに当為の課題であろう。



三遠南信自動車道飯橋道路関連遺跡発掘調査完了記念展示会
「掘るしん in いいだ」パンフレット 平成28年11月4日発行
(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
E-mail info@naganomaibun.or.jp
<http://naganomaibun.or.jp/>

